

旅 遠 く

— アジア巡礼紀行の歌 —

夜久 正雄

旅

年のはじめに同じく旅といふことを
おほせごとによりてよめる歌の中に

旅遠くルンビニの野に行き暮れて
橋のたもとに螢飛ぶ見き

昭和六十年一月十日

夜久正雄

まへがき

旅

旅遠くルンビニの野に行き暮れて橋のたもとに螢飛ぶ見き

右、昭和六十年歌会始（御題「旅」）に詠進しました私の歌が、はからずも選に預りました。一月十日の歌会始に参列を許されまして、大前に於て披講の榮譽を辱くいたしました。

会が終りました後、宮殿御回廊に侍立しまして、天皇陛下に謁見を賜り、御言葉を戴きました。且つ、恩賜の春慶塗の短冊箱を戴き、さらに賜餐に預りました。生涯の面目とはこのことでございます。これ偏に師友諸先輩の多年の御教導御厚誼の賜と存じまして、心中に恩徳を深謝申上げてをりましたところ、今回またはからずも、亜細亜学園ならびに青々会有志御一同さまの祝賀の意を以って、私の歌集をお出しくださることとございました。重ね重ねの御厚志に甘えることになりましたが、前々から秘かに期するところのありました「アジア巡礼紀行の歌」を以て之に当てていただくことにし、題は記念のため、選歌の第一句「旅遠

く」と致しました。ただただ御礼申上げるのみでございます。
一言御礼の言葉を以って「まへがき」の御挨拶にいたします。

昭和六十年一月三十日

夜久 正雄

八、スリランカ紀行の歌	(昭和五十五年八月)	97
九、バングラデシュ・ダツカへの旅	(昭和五十八年二月)	107
あとがき		115

一、韓国への船旅

(昭和四十七年八月十六日～十九日)



瀬戸内海の夕日

浪の穂のちぢにかがやく瀬戸内をわが船はゆく韓国さして
まかがやく海のはたてにうすがすむ大島見ゆ何島ならん

うすがすむ大島影時のまに近づきくるか船足速み

いにしへのますらをのうたを誦しつつ瀬戸内の海を旅ゆくわれは
島山のかげうちめぐる瀬戸内の海の船旅たのしかりけり

玄海の日の出

瀬戸内の日の入りは見つ玄海の日の出を見むと甲板デッキに立てり

明け空のむら星のかけいつのまに消えはてにけむ日の出まつまに

玄海の海ゆく船にあふぎたる暁の空のオリオンのかげ
われは見つ玄海灘の水平線の雲の中より出でし朝日を

百済の古都・扶余にて白村江の戦を憶ふ

旅遠く百済のみやこ扶余の町の宮居のあとに友と立ちけり
がけ道をあへぎのぼれば大いなる白馬江見ゆ流れゆたかに
白馬江流れしづけしいにしへの大きいくさのあととしもなく
名も知らぬますらをあまた国のためいのちすてけむこの河のべに
流るともなく水ゆたかにたたへたる白馬江はや去りがてぬかも
旅遠く来てわが見つる白馬江とはに黙してただ絵のごとし

八月十八日 漢江の洪水

降りに降る雨にみなぎる漢江の激流おそろし旅ゆく身にも
雨の中老婆を背負ひ子を連れて逃るる人見つバスの窓より
韓国の洪水なりとみな人のカメラを向けてあやしみもせず

帰 途

船よひの吐き気たへつつ玄海をかくてわたりし人々おもひつ
船のゆれしづまりにけりいつのまに瀬戸内海に船は入りけむ
いにしへのますらをたちの船旅もやすらぎにけむ瀬戸内に入りて

をりをりの歌（補遺）

山のはの雲さまさまにいろどりて日は出でむとす日本に変わらず

人のこゑ朝鳥のこゑ車の音、儒城のひと夜ことなく明けぬ

雨けぶる低山よにもめぐりつつ旅のながめは日本に変わらず

ともし照るちまたの尽きて漆黒の闇ひらけたり韓の国原

貧しげの人々あまた涼むなる韓国の町を友と歩みつ

二、韓国・百済の古都と白村江戦蹟

(昭和四十九年十一月二十三日～十二月一日)



ソウルから公州へ

低山に雪ふりおける韓国のソウルに着きぬ空の旅より

冬枯の田の面さむげに行く人の日本の国に変らぬ韓国

うすら雪おきたる野らのひろくして人かげまれにさびし韓の野

鳥致院人かげ見えきてうちつづくすかけ並木もなつかしきかな

道の辺に「忠烈祠」といふ標示見て寄らですぎにき心のこれど

公州

からくにの夜のしづけさ水道のしたたる水の音のみきこゆ

熊津くまづりの河のひろさよ雪おける河原の白洲に人まめのごとし

かの岸が半月城と指さして語らふ、書にのみ見し城を

いにしへの百済の都ここにして日本はいづちわが大君は

大君のいますはいづち東の日出づる方にをろがまむかも

いにしへのいくさびとたちいかばかり大和の国を恋ひわたりけむ

とつくにの大き河の辺に戦ひて名もなくうせにし人いくばくぞ

古都・扶余

うすがすむ山々幾重つらなりてはるかに渡る鳥さへ見えつ

群なしてはるかに渡る鳥かけを百済の古都ゆ見放さけつるかも

大き河つらなる山々かすむ町すべてうつくし夢のごとくに

扶蘇山の軍倉のあとたづね来てしるしに拾ふ焼けし瓦を

義慈王の魂うばひけむ扶蘇山の半月樓のながめなりけり

扶蘇山の半月樓にたたづめば半月かかれり夕ぐれ空に

遠く来て百済王城・扶蘇山に鳴くかささぎを見聞きせむとは

扶蘇山に群れ鳴きあそぶかささぎをわが亡き友の見聞くすべもが

亡き友の魂かとも思ふ、韓の国百済の古都にむれ鳴くかささぎ

韓国にともにあそびし友はなくてわれはふたたび古都に來りぬ

夕ぐれの寒き水面にひびくなり水神まつる韓の巫女みこのこゑ



かの道が朱雀大路と聞くからに心にうかぶ百済の都

滅びにし百済の都かげにさへ浮ぶる人のまれになりぬる

韓国の長鼓かなでつアガシ（乙女）らのうたふを聞きぬ百済の古都に
アガシらのうたのしらべに底ふかき悲しみのありて聞きあかなくに

百済の城跡

朝もやに沈める扶余をあとにして百済大橋いま渡りけり

扶余を出て白沙にむかひ行く道はもやに霞みて人、影のごとし

朝もやの中よりあらはれ出でし人、牛ぐるま引き妻子つれたり

白沙場（白村江古戦場）

年月の願ひ果して白沙場人もたづねぬ浜にわれ来つ

親しめる百済を救ふと大和より船泊てにけむこの白沙場

思はぬにいくさ敗れて捕はれし人もありけむこの韓の国に

たづねきし白沙の邑は北鮮のスパイいましめ警戒きびし

いにしへの大きいくさのあとに来て黄海におちる夕日を見たり

錦江の夕かぜ寒く西日いま黄海の沖のもやに沈みゆく

西のかた海をおほひて大唐の船寄せにけむこれの浜べに

大唐の水軍追ひて大和より援けの船もあまた寄せにけむ

百済人いかに見けむ大唐の船と戦ふ大和の船を

外国のこの川口にますらをあまたうせにき千三百年前

錦江の河風さむし白村のはくすまいくさのあとをたづねてくれは

益山郡王宮面

いにしへの百済のみやこにありしとふ塔のかけかも暮れゆく空に

暮れてゆく野末に塔のかけ見えて大和の国の思ほゆるかも

しづかなる冬の日和の夕づけど百済のみやこ去りがてぬかも

海印寺

珍らしくみどり繁れる山のまに入り来るここはみ寺の聖地

松山のそがひの空に照りわたる月は満月、海印禪寺

旅遠く伽耶・海印寺たづね来て目にしむばかり青き空を見つ

文明の都市のうしなひし青空を伽耶のみ寺の松のまに見つ

松風かたぎつ瀬の音がさうさうとおこるひびきの聞きあかなくに

草むらに羽振はぶきのこして飛び立ちし鳥は何鳥、きじきなりといふ

年ふりしみ寺の松のま朝ゆけば小鳥しば鳴く、人もおそれず

目の前の瀬の音ききつつ枯枝のちぢに光るを見つつしもとな

ソウル

満月はソウルの町をいてらしていま山の端はに沈まむとする

ともし照るソウルの夜景、それもあれど百濟大野の夕日をわれは

あかねさす夕の空に石塔のそびえて見えし、目にのこりけり

群山の丘のへに立ちて朝日さす白村江をたしかにながめつ

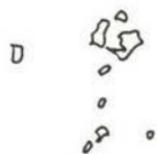
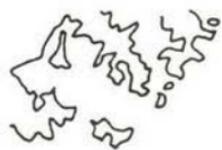
そこここに叫ぶもろごゑ聞えきて明けゆくソウルの町はいさまし

泊りたるホテルのロビーいまして兵士の立てば何かおそろし

帰 国

夢さめて旅にはあらず日本のわが家にありと思ふやすけさ

三、 中 華 民 国 ・ 台 湾 に て



台北市芝山巖公園にて

(昭和四十七年十二月三十一日)

芝山巖公園は嘗て、小田村寅二郎兄の母方の祖父君揖取道明氏他七名の殉難烈士をまつる神社のあとといふ。揖取道明は吉田松陰門下小田村伊之助(揖取素彦)の二男久米次郎にして、一時久坂玄瑞の養嗣となり、後復籍せる人。明治二十八年六月、台湾に教育の基礎を築くべく渡台、伊沢修二の下で学務部員となり芝山巖に学堂を建てたが、十二月三十一日一月一日、土匪の襲撃を受けて殉難。事は「新輯・日本思想の系譜」(時事通信版)下巻三七七〜八〇頁に詳しい。昭和四十七年十二月三十一日、小田村兄に伴って同行七名、遺蹟を訪ふ。帰国後、数日、感銘黙しがたく数首の和歌を詠みて備忘とす。

わが友のおほぢのきみがくのためにのちすてにし芝山のふもと

顕彰の碑はこぼたれて新しき碑はたてれどもきみをそしれる

みやしろのあとかげもなく人の住む家さへ立てりそのたかきとに

そのかみの芝山神社のおもかげはただ石段の石にのこると

ますらをのみたままつらむよしなくてわれさまよへり友いかならむ

名もしらぬ大木のもとをゆにはとしようつしゑおきてみたままつりぬ
天がけるたふときみたまようまごわが友のまつりをみそなはしませ
まつられぬみたまをまつるとたづねきし日本人われらを見そなはしませ
しらぬひつくしのくにの新米を友は持ちきてみたまにそなふ
日本人の墓ならむといふ墓石の文字削られて知るよしもなし
ますらをのたふれしあとはいちめんの野らとはなりぬ碑もなく
名も知らぬ小草の花の咲きたるが手向ともなれ人知らずとも
神宮のあととはかしことさすあたり国際ホテルのビルそびえたり
亡国のかげかきまみし思ひなり神宮神社あとかげもなく
たれ人をうらむとなしに大いなるよのうつろひをひしと感じぬ

淡江大学にて講演（昭和五十六年五月四日）

朝の雨やみて校舎の白壁に「植義廉恥」の文字あざやけし

台湾の人ははたらく夜遅く人ごゑたえずして今朝また早くより

朝の雨やみてきらへる山々のすみゑのごとし右手に左手に

バイクにて通ふ学生あとをたたずバイクの音の一日ひびかふ

気がかりの講演の責めやうやくにはたさむとして宿にいこへり

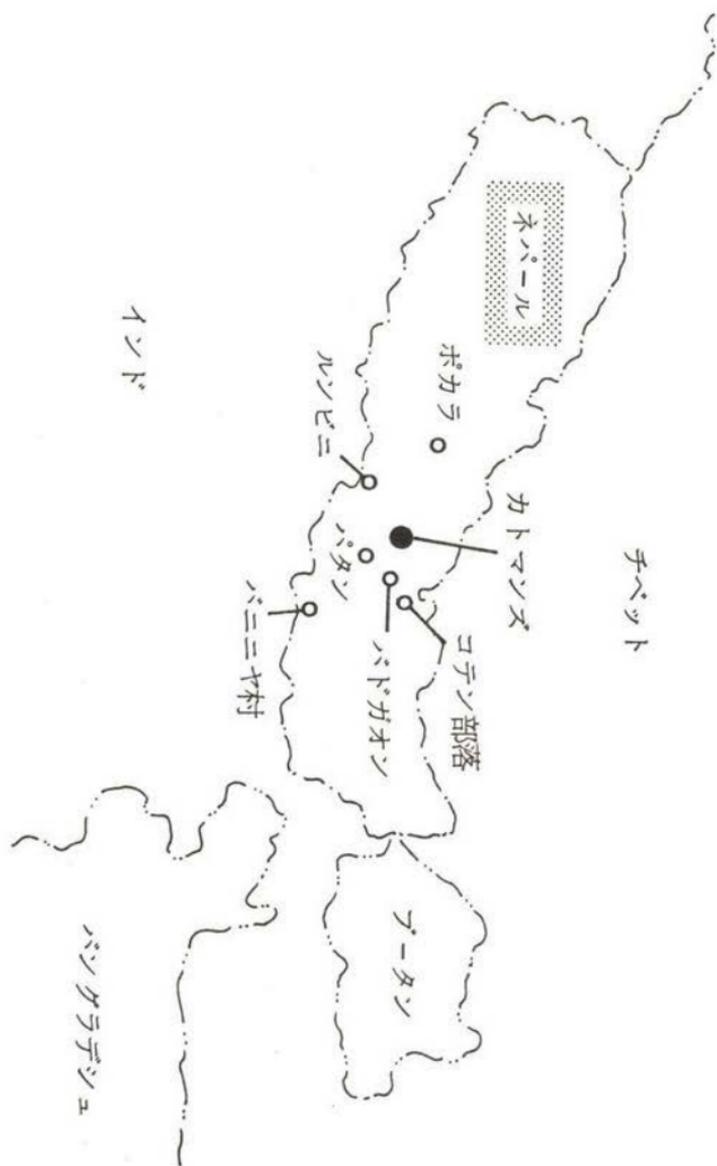
おろかなるわれをも友と心よりむかへてくるる人のなさけよ

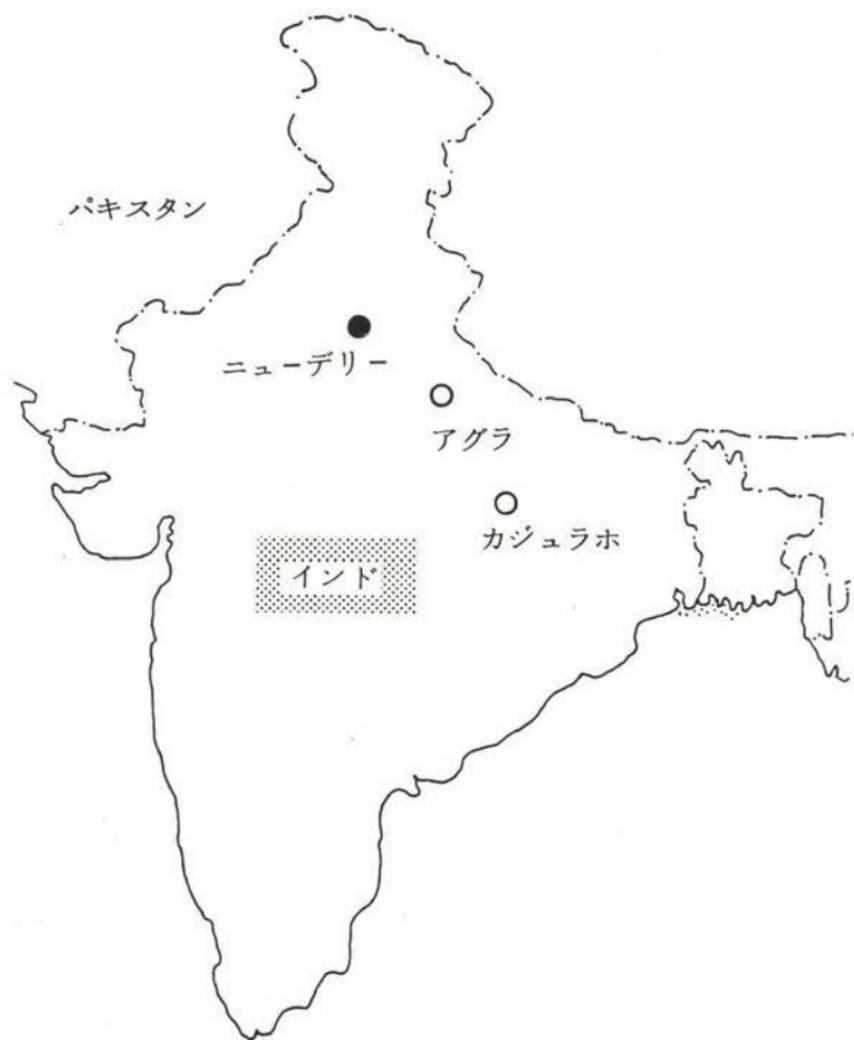
観音の顔に見ゆるといふ山の胸乳ゆたけし観音の山

たなびきし雨雲はれて山肌のさやかに見えきぬ淡江の山

四、ネパール・インド紀行の歌

(昭和五十一年三月二十日～四月五日)





三月二十日 出発

白波のふちどる島々紺碧の海に見え来て飛行機はゆく

雲海の雲の白さと同じなるましろき富士の雲の果に見ゆ

雲海の雲のはたてに白雲と同じ白さの富士見えにけり

富士も見つ大島も見つみんま南へ一路わが機はすすみゆくらし

雲海の上こともなく飛行機のゆくと思へば心おちるぬ

気づかひし風邪もなほりてうらやすく飛行機はゆく南の空を

空の青、海原の青とけあひてまろき天地をマニラにおりる

この見ゆるマニラの海よ国のためみおやたちあまたここにうせたる

「まつられぬみ祖のみたま」といふことばひしと思ひぬマニラの空に

紺碧の海にうかべる南の島々の上を飛行機はゆく

さまざまの形をしたる白雲のむらがる上を飛行機はゆく

むれ立てる大きい白雲さながらに地球のいぶきと思はるるかな

バンコク 三月二十一日

むしあつきバンコクの夜、高層のホテルにいねて蛙ききけり
うつつなく夜中にねざめて耳にする蛙のこゑよバンコクにて
バンコク高速道路をゆくバスの車窓に見たる白きはすの花

暁の雲まに赤き太陽をちらりと見たり空港近く

夏草のコスモスらしき咲くを見てバンコク空港とび立たむとす

雲海の上ゆく飛行機の空はれて高どに白き朝の月見ゆ

いにしへのからてんじくは震旦の果といふインドへ飛行機はゆく

さまざまの形をしたる白雲のうつるパノラマよにおもしろし

ガンジス河上空にて

大き河つばさの下に見え来しはガンジス河の流れなりけり

河口は海峡のごとく幾すぢの川をあつむるガンジスの河

うねうねとさかのぼる道幾すぢもありと見たるは河にてありけり

大き河大きデルタの大自然大地に生れしインド文明

ネパールの首都カトマンズ着、マルラ・ホテル泊

夜を守る犬の声たえて高らかに暁つぐる鶏のこゑする

時つぐる鶏の高音にしづかなるカトマンズの夜明けはなれむとす

幼き日あこがれたりしヒマラヤの麓の町に今日来つるかも

ネパールの王都を行けば平安の昔の都を歩むかと思ふ

豚を曳く乙女かなしも土塀の下にすわりて動くともせず

暮れてゆく四方の山なみ平安の都に似ると語りつつゆく

雲もなく晴れたる空のさはやかにつらなる山々いやさはやかに

にはとりのこゑに明けゆくネパールの王都の朝のなつかしきかな

ネパール旧都バドガオンに行く（二十二日）

ダウラギリ、マナスル、ランタン、アンナプルナ、ヒマラヤ連峰見渡されけり
晴れ渡る空の遠きに雪おけるヒマラヤ連峰見渡すうれしさ

バドガオン五重の塔の前にしてくぐつ（傀儡）のうたふうた聞きにけり

カトマンズ

カトマンズ王宮前の大通り並木の大本に藤の花見つ

とつくにの都を見むとわが行けど貧しくくらすこの人々は

朝早くミルク買はむと店の前に幾ときたちし乙女なりけむ

ゆきかひのしげき大路のすみにゐて豚曳く乙女いかに生くらむ

貧しげに見ゆる人らの中ゆきておそれはあらずここカトマンズ

ネパールの人もことばもわが国に似ると思へば心やすけし

遠く来てここカトマンズ朝早く野生の藤の花をたのしむ

朝早く何か仕事に行く子らとしばし語りて別れたりけり

ボロを着てはだしの子らの寄りて来てルピーをほるがあはれなりけり

ルンビニ園

泥みちの埃におせつたつね来てルンビニ園にいこひけるかな

年月のおもひ果すと釈迦の生地ルンビニにしもたづね来にけり

ヒマラヤの麓はなれて酷熱の土かわく地にたづね来にけり

土かわく広野はやうやく暮れゆけど西日はいまだ雲間にたかし
赤土の田のかぎりなくうちつづくタライの広野くれゆかむとす
野の果にひとすぢ白くたなびくは霞にはあらず埃なりけり

牛ぐるまひきゆく牛の足ごとに立てたる埃、野にたなびきぬ

西日いま地平に近くやうやくに涼しくなりぬタライ平原

酷熱の大地かわきてすべもなきところにシャカの生地はありけり

紀元前三世紀といふアソカ王石柱の文字しるくのこれり

ハンケチヤルピーをねだる女の子とルンビニ園の木かげに語る

ゆき暮れてバス降り立てば思ひきや闇の川べにほたるとぶ見ゆ



はてしなきタライの大地にいでし日ををろがみにけりホテルの庭に

ポカラへ向ふ飛行機上にて

雲の上につらなるヒマラヤ連峰のパノラマなして窓にめぐれる

あざやかに窓にめぐりし連峰の雲間に消えつ夢のごとしも

アンナプルナ連峰につぐ連峰は何の山かも雲の上にそびゆ

幾層も重なる雲の上にしもわづかにのこれり山のいただき



大空にみちたる星の一とて見えぬあたりか山の見えむは

ポカラのホテルにて

窓あけて見ておどろきぬアンナプルナ大ぎ高き山、暁空に

暁の空につらなるアンナプルナ、白き山脈に朝日さしそむ

神さぶる白きいただきを暁の空に揚げばをろがまれけり

雪おけるヒマラヤ連山いてらしてのぼる朝日ををろがみにけり

朝日さすアンナプルナをまなかひにあつき日本の茶を飲みにけり

朝日さす神の山々見てあればまがなしき笛の音聞えきぬ

横笛の音色もとめてわがゆけばチベットの旗立ちたるあたり

横笛を吹きやめてをどる若者の姿見えたりかなたの部落に

明空に姿見せたるマチャプチャリ仰ぎてをどる若者はたれ

暁の空につらなる神の山、山々かけて鷹むれわたる

ヒマラヤの山々見ゆるこの庭に鷹むれあそぶうつつなりけり



バスおりるすなはち人らのよりつどひ物うりさわぐチベット部落（ホカラ難民部落）

名も知らぬヒマラヤの山つぎつぎにめぐれる見ゆも雲の上にして（飛行機上にて）

ネパールの大きタ日は山のまにかかると見えて見るまに沈みぬ（カトマンズ）

やせこけし身を一枚のきれにつつみうづくまる子よやがて死ぬべし

みすぼらしき子どもら街にみちたれど不思議なるかな泣く子はまれなり

コテン部落

道すがらうたひてくるる山人の草刈のうた聞きあかなくに

ネパールネパールの山おく深くたづね入りてかっこうの鳴く村につきけり

やみの夜のともしかこみて村人はうたひてをどる更くるも知らずに

ネパールネパールの長鼓にあはせて子らふたりまひてはをどりをどりてはまふ

村人はつぎつぎにここにつどひ来てうたを聞きつつをどりを見守る

ネパールネパールの山奥深くたづね入りてコテンのうたを聞くがともしさ

山人のうた聞きあかずまひをどるまひも見あかず夜はふくれども

ヒマラヤの麓の山の奥ふかく万葉のむかしの残るかと思ふ

ネパールネパールのこの山人の顔立ちの日本人によく似たりけり

ことばこそかよはぬものかとも舞ふ心はかよふタマンの人と



ぬばたまの夜あけとともにおきいでて水汲みにゆくをみなともしも

たな雲をくれなるにそめて山の村コテンの朝の日は出でむとす

かさをなる空につらなる尾根の上に土にてつくれる村の家の見ゆ

大いなるボダイ樹の根をほとと見てまつれる神は何の神かも

峠ふく風にふかれてなつかしきコテンの村のかたかへりみつ

バイラワに向ふ

雲の上に連るヒマラヤ山脈をまた見つるかも飛行機上より

バニニヤ村

車走る舗装道路のわきにしてハゲタカ群れをリタライ平原

村をさの納屋の二階に村人ら寄り来てわれらを見守るなりけり

遠く来てタライの広野バニニヤの村のやしろををろがみにけり

暮れてゆくタライの野づらにひびくなる脱穀の音、鳥かと思ひし

気づかひし健康かにかくたもちえてネパールの旅をへむとすなり

ネパールの山村のうた酷熱のタライの村のうたを聞きけり

バイラワの大き寺院の一隅に太鼓かなでていのりつづくる

大いなるヒンズー寺院の石の上に伏したる人ら何のゆゑかも

バイラワのよき人の家にいねむとすしきりなくなる虫の音ききつつ

遠く来てタライの原にしきり鳴く虫をききつつ今宵ねむかも



遠く来てタライの宿の夜半さめてしきりなく虫の声を聞くかも

りんりんと鳴く虫の声わが右の耳に聞えぬことに気づきぬ

右の耳しひしかと思ひおどろきてたしかめてみぬふたびみたび

鳴く虫の高音は聞えずただひくき友のねいきの聞ゆるなりけり

しひしにはあらず高音の聞えずて耳遠くなりしにわづかやすらぐ

目しひにて世渡る人あり片耳のしひて心のなゆと言はめや

カトマンズ、マルラ・ホテルにて

石垣に咲きまっはれる紫の朝顔の花うつくしきかな

カトマンズ、ホテルの庭の石垣に朝顔の花咲きそめにけり

朝顔の花咲く見ればカトマンズ秋立つごとし春とはいへど

スイトピー、朝顔、黄菊のごとき花、四季くさぐさの花咲くらしも

うつくしき花を咲かせて人知れず消えゆく小草のいのちともしも

四月一日 インドへ

晴れつづくこの垣山に雲白くたなびきにけりカトマンズけさ

垣山に雲たなびきてカトマンズ日本の秋を思はしむかも

石垣に朝顔の咲くカトマンズを発ちてインドにけさむかはむとす

秋のごときカトマンズ発ちて飛行機は暑さにけぶるベナレスにつきぬ

カジラホのみ寺はいづく土あかく暑さにけぶれりインドの荒野は

赤土の荒野はひろくひろがりて暑さにけぶれり翼の下に

点々とかけりて見ゆるは飛行機の上なる雲のおとす影ならむ

いくめぐりうねりうねりて水脈み白くはてなくつづけりインドの大地

日本人顔と鋭きわれをあやぶむか人らより来ずとなりの席に

灼熱にけぶる大地のそここにうねりにうねる白き水脈み見ゆ

カジラホの寺院なるらむ白き塔建物も見ゆ乾ける荒野に

別 離

チベットの難民キャンプにじゅうたんを織るさをとめと握手のみして
また会はむ日はいつならむ空港に手ふる人たちの遠ざかりゆく
チベットに入るといふをとめ山深きタマンの人よいつまたあはむ

タジマ・ハール（インド） 四月一日

乾きたる荒野のかなたに白き塔タジマ・ハールの見えて来にけり
うつしゑのそのさながらに白き塔空にそびえつ水に映りて
思ひきやタジマ・ハールの前庭の池に浴ふ道わが行かむとは
生けるまにタジマ・ハールの前庭の芝生に伏してあかず見むとは

くれてゆくタジマ・ハールをながめつつ土地の若ものとしばし語りつ
沈みゆく日のいろどれる空さして鳥鳴きわたる何鳥ならむ

池水にかけをうつして夕空にタジマ・ハールはとほにしづけし

タジマ・ハールの前庭くれば日の沈む空にほのかに新月かかれり



ムガールの古城に立ちて見渡せば大地はまろし地平つづきて

帰途バンコクに寄る

タイにすむ卒業生とまとりて語らふしばしたのしかりけり

バンコクは歓楽の町、うべしかり、危機をはらめる都市にもありけり

うすがすむヴェトナムの岸边ながめつつ飛行機はわが旅の帰路ゆく

帰 国

日本の村々山川なつかしもネパール・インドの旅めぐり来て

山川の清き流れの目にしみてなつかしきかな日本の自然は

野に山に木草しげりて水清く流るる国はありがたき国

帰国後、富士山麓山中湖畔にて

月照らす青き夜空に浮き出でて白き富士見ゆ月に映えつつ

湖のべに灯しじ照り雪しろき富士そびゆ見ゆ月照る空に

湖にうつれる富士のま白なる影ゆらぐなり風もあらぬに

かがみなす朝の湖面にうつりたる富士のま白のかけゆらぐなり

湖にかけをうつして朝空にそびゆる富士のさはやかなるかな

五、中国・モンゴル紀行の歌日記

(昭和五十二年八月二十二日—九月七日)



昭和五十二年八月二十四日

北京より国際列車モスクワ行にてモンゴル人民共和国の首都ウランバートルに向ふ。
汽車、万里の長城を過ぎてモンゴルに近づく。

長城のとんねる過ぎてわが汽車は青竜橋の駅につきけり

青竜橋の駅のホームに降り立てば秋のけはひのさはやかにして

おのづから山のすがたのおだやかにあらたまりけり長城過ぎれば

八達嶺の岩山のまの谷すぎて草山のまの草原つづく

くだりゆく汽車の窓よりかへりみる長城の山うすがすみゆく

一すぢの河白く見ゆ高原のはるかにかすむ山につくあたり

張河口いづくなるらむ北白川宮永久王殿下戦死の土地は

のこぎりの刃なす山々かさなりて陰山山脈姿見せ来ぬ

高原のはてなる山のとがりほの下のあたりか張河口の町

旅遠くわれら来りぬ夏雲の群れ立つ陰山山脈近く

岩山に雲立ちわたる陰山のふもと高原どこまでもゆく

草原に羊の群の見えそめて内モンゴルに汽車近づけり

ゆく汽車の鉄路にそひてどこまでもつづく草丘モンゴル草原

泥をもてかためたる家かたまりて村をなすらし漢人たちは

空につく山は見えずに見るかぎり平原つづけり地平線まで

モンゴルの平野のはては草丘の地平をかぎれり起き伏ししつ

モンゴルの草原をゆく汽車の中みながらにして日にやけにけり

愛らしきモンゴル少女のいっしんにモンゴルの歌うたふをぞ聞く
はるかなる地平の丘に夕日さして点々と白く羊ゆくらし

夕日さすモンゴル平野ははてしなくひろがりて果は空をかぎれり

放牧のラクダのむれのゆく汽車の鉄路のわきをしづかに歩めり

空かぎる地平のあなたの棚雲にモンゴルの日はいま沈みゆく

見るかぎりつづく草原日のおちて夕さびしきいろとなりけり

モンゴルの空の清さよ空かぎる地平たひらに四方にめぐれり

モンゴルの大きき夕空日の落ちて青みましつつ暮れまざるなり

暮れ残るモンゴルの空青くして地平にともるともしびひとつ

ゲレルとふ名もあいらしきモンゴルの少女と汽車にあひて別るる

八月二十五日 車中にモンゴルの夜は明く

まかがやく大き星見ゆ明け白むゴビの地平の空の高みに

うつくしきゴビの星かげオリオンは地平に半ばかくれたりけり

暁のゴビの地平はどこまでも続きてつひに円をなすらし

明けなづむゴビの地平に豁然と日は出でにけりをどるがごとく

かがみなす瑞^{みづ}の朝日子ひらめきてくるめきのぼる光たふとき

何もなきゴビの地平にをどり出でし瑞の朝日子をろがまれけり

明けてゆくゴビの地平の空の色さみどりのいろ透るばかりに

明けてゆくゴビの地平の紫のおき伏す雲は山かとも見ゆ

サインシヤンドを過ぎて

降り立てば冷え入らむとすモンゴルのサインシヤンドの明けのフォームに
大いなる竜巻雲の地の果に見えてをりをりいなびかりする

ゆく汽車のほとりの岩にわし一羽みづくろひすも朝日を浴びて

夜一夜汽車は走りて明けにけるゴビの地の果に山脈見え来つ

地の果にかすみてつらなる山脈のなつかしきかな低くはあれども

青き水たたふる湖水と思ひしは雲のおとせる影にてありけり

地の果の竜巻雲をふちどりて虹立てる見ゆゴビの草原

なだらかな草丘の背の稜線の空をかぎりてつづくやさしさ

かさをなるモンゴルのこの朝空を白斑しらふの鷹のかけりゆく見ゆ

飛びすぎるシャーチガイ(鳥の名)かも日に映えて羽ぶきはげしく白き輪をなす
青き空かぎる草丘の尾根をゆくはるかな馬のかけ黒く見ゆ
おだやかな草丘の尾根暁の空をかぎりてつづくしづけさ

八月二十八日 ウランバートル日本人墓地に詣る

はげ山の麓の野末まさびしく風鳴りわたる日本人墓地

垣山の尾この上への空はただ晴れてますみの色のかへりてさびし

とらはれの身をなげきつつうせにけむ人を思へば身ぬちもさむし

すめろぎのみうたとなへてとつくにの野べにうせにし人とむらひぬ

墓地あれて青草はただなきがらの上のみ生ふと聞くがかなしさ

うせにける人々の名を石くれに貼りたる紙もちりゆかむとす

板切れの墓標のあるはおとづれし遺族のありて建てにけむかも

大方はただ石くれに名をしるす小さき紙をはりて墓とす

わが友はここにうせし友の名をたづねてつひにたづねえざりき

モンゴルの野末の墓地よ咲く花の草さへ小さく花さへ小さき

やがてくる冬ともなれば訪ねくる人もなからむ墓地は氷りて

ウランバートル日本人墓地晴れたれどひた吹く風の音のさびしさ

日本人墓地守る翁おきないつまでも帽をかかけて見送りくるる

ホジルト（温泉保養地）にて

降り立てば草かぐはしく空澄みて清き天地何といふべき

ホジルトはものみな澄みてかけりゆく鳥の羽はぶきの音さへ聞ゆ

ホジルトのますみの空をかけりゆく鷹の羽は白く日にすきて見ゆ

かぎりなく大気は澄みて草原のはての尾おの上への馬さへも見ゆ

八月三十日

ホジルトの岩山の上ゆモンゴルの日の出を見むと草原をゆく

ホジルトの岩山の上にわれ立ちてモンゴルの日をろがみにけり

モンゴルの日をろがみて大みうたとなへまつりぬ岩山の上に

草山を出づる朝日にてらされて小草咲く野をゆくがたのしさ
鳥の音のかた見かへれば草丘の尾の上の空を二羽かけりゆく
嘴赤はじきモンゴル鳥漆黒の羽はねのいろさへ清く見えけり

とつくにの小草くさ咲く野をあゆみつつわが大君をしのびまつりぬ

カラコルム（元朝古都の遺蹟）

はて知らぬ草原来れば忽然と白壁の大き寺院見え来つ

旅遠くわれら来りてカラコルム大き礎石の上に立ちけり

日ざしなほ残れる草の丘の上に大きモンゴルの月出でむとす

草丘に西日沈みて草丘ゆ日よりも大き月出でにけり

九月一日　オルホンの滝

ウールティン・トハイの崖の上に立ちてオルホン河の瀬の音を聞く

絶壁の上より見下すオルホンの河清くして魚あそぶ見ゆ

川崖に木々の繋りてオルホンの谷間うつくし草原来れば

オルホンの滝のおち口落ちたぎつ白き流れの日にきらめけり

落ちに落つオルホンの滝うちしぶき虹さへ見えつ滝壺のへに

滝つぼに落ちたぎつ滝の水しぶき滝の上まで舞ひ上りつつ

ホジルトのパオ（包）にて

目ざむればもち月のかげ皎々とパオの窓よりわれをいてらす

天窓てんまどの月見てあれば草を食む馬の音すもパオをめぐりて

九月二日 車中泊

帰途

汽車のゆく右も左も草丘のかぎりなく続き空をかぎれり
朝日さす草原のはておのづから蒼くかげりて海原のごとし
空はすぐそこかと思ふこの見ゆる草原のをち空をかぎれり
ま日てらすゴビの沙漠に町をつくりはたらく漢人ををしと思ふ

ザミンウデニ連は国境の町

とまりたる汽車おのづから雲のかげに入りてわづかに暑さやは和らぐ
水なきにたふれにけむか酷熱の二連の町に死ぬ小鳥見つ

愛らしきピオニールたち外国人われらを見張れリヅルフの駅にて
徳王の王府のありしはこの辺と聞きてすぎゆくヅルフの町を

九月四日

片われの月かがやきて明けなづむりよくや緑野を汽車は北京にかへる
明け空に墨絵のごとくそびえたるはったつれい八達嶺の谷を汽車ゆく

有明の月かがやけどあけぐれの谷ゆく汽車に長城見えず

居庸関きょうかん長城あたり汽車はゆけどものみないまだ明け昏ぐれにして

モンゴルを離れて二日鼻水の出るに気づきぬ北京の宿にて

九月七日 帰国の朝

ことなくて帰国の朝となりにけり腹すこし痛けれどやがていゆべし

北京市のホテルにさめてうつつなく聞く音の中に馬の足音あのとす

自動車の騒音の中に聞えくる馬のひづめの音のなつかし

帰国の飛行機上にて

遠空に積乱雲のつらなりてそこに一つの国あるごとし

海ゆ吹く風にかあらむ吹きよする霧雲つきて飛行機はゆく

目の下に洪水なるらし大き河あふれて田畑の水かぶりたる

漠々とつらなる雲の海の上を飛行機はしづかに日本に向ふ

六、中国再訪の歌——百二首

(昭和五十四年八月二十九日——九月十二日)

——北京・洛陽・開封・鄭州・西安——



北京空港（昭和五十四年八月二十九日）

西日さす高梁畑こうりやんうす赤くそまれる夕べ北京に着きぬ

地の果はてに大き西日の沈みゆく北京空港にまた着きにけり

うつくしき片われ月の楊柳ようりゅうの梢にかかれり北京空港

青みます秋の北京の夕空に片われ月の光ましつ



ともし照る天安門を入りゆけば街のざわめき絶えてしげし

瑞門ずいをくぐればあたりしづかにて虫なきしきる、往き来も稀に

肩だきて若き男女のもつれくる、中国はつひに日本にかはらず

北京から洛陽へ向ふ車中にて

楊柳の並木かぎりなくつづくなかを汽車は走れり車内にさむれば

明けてゆく沿線の町家々の灯ひともる見れば去年こぞに交れり

暁のさびしき駅に人もなく沙河県としも書きてありけり

すぎし日の日露のいくさこの沙河にたたかひしかとなつかしみ見つ

みおやたちみくにまもると大陸に流しし血しほあだにはすまじ

人の力をほこりおごりて天地にしたがふ道を忘れしは誰

黄 河

黄河見ゆとの声にて見れば泥水どろの海の如くに大き河見ゆ

対岸はうす紫にかすみつつ流るともなき泥水の河

登封の中岳廟

中岳廟見のぼり来れば奥殿おくでんは太定山だいていの寢室といふ

太定山は小定山しょうていを妻としてこの廟の屋やに寝るといふなり

太定山をまつれる廟は草あれて柏びやくしん榎のみぞ年ふりにける

小定山

行けど行けどはてなき黄土の平原をえぐりて川は丘をつくれる

遠く見て丘かと思ひし小定山岩山いざなここし近づきて見れば

目ざしたる小定山は岩山のそびえ立つ山近くに見れば

漢 墓

二千年昔のくらしをよがきたる石象石の見れどもあかず

思はざりき東漢の郡太守夫人の墓の彩色壁画見むとは

途 上 少 憩

くるま降りしわれら囲みて人々はものめづらしげにわれらをながむ

中国を見に來しわれら中国の人にかこまれて見らるるをかし

旅人のわれらは見らるる、外国の人とあふことの稀なる人らに

少林寺

日本の僧の作りし漢文の銘あり登封塔林の中に

大唐の太宗世民と自署したる文字あり少林寺碑林の中に

鄭州にて（九月一日）

鄭州の夜明はしづけし人わめく大き声よく透りて聞ゆ

人わめく声に嘆きの響ありてねむれずなりぬ外国の宿

鄭州のホテルの前のすずかけの並木道ゆけば朝日きらめく

大陸の秋の朝日はをがまむにまぎらはしきかな露かかれども

邙山灌漑ダム見学

ダムの上に登りて見れば泥水の大きき黄河の一目に見ゆる

泥の洲の黄河のもなかを浪立てて一すぢ流るる水の勢

泥の洲のごとくに見ゆる河の中を一すぢはげしく水の流るる

はるかなる水かみよりの勢をあつめて流るる泥水すさまじ

灌漑のダムの責任とる男三十二歳と聞けばたのもし

日本人によく似たる顔、切れ長の目のうつくしき男なりけり

九月二日

東の空くれなるにいろどりて大陸の日はいま出でむとす

うち仰ぐ柳の梢にみる鳥の動くともせぬ朝日に向きて

動くともせぬと見るまに飛び立ちて近くの木梢に鳥はうつりぬ

博物館にて

商代のものと伝ふる陶人めんぼん面范その面めんまさに生けるが如し

幾千年むかしのからの面范のわれに似たりと思ふもあやし

開封・鉄塔

十三層あへぎのぼればあなかしこ頂にいます石の阿弥陀仏

頂の石のみほとけ仏に手をかけて懺悔しまつるつもれる罪を

南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏つまや子やもろびとのうへにさちたれたまへ
十三層息のをにして登りくれば玻璃の煉瓦の飛天すばらし

洛陽

洛陽に汽車は着きけり降り立てば初秋の空に月照りまさる
洛陽の一夜の明けて戸をくれば虫なきしきるホテルの庭に
洛陽の一夜めざめて宿の床にものをぞ思ふすべなきまでに
洛陽のホテルの前の道芝に白露おけり虫は鳴きつつ

朝

人々はおのおのものに書を読み朝の体操す人目はばかりらず
日本人われのみ人目はばかりて朝日ををがむこともしかねつ
くれなゐにうすくもりたる洛陽の朝日をろがみみ歌となへぬ

洛陽から長安へ、車中泊

真夜中の汽車に目ざめて外見れば人なきさびしき駅にとまれる
空くもり月のひかりのほのかなる夜半の駅に汽車のとまれる
ほのかなる月の光に駅の名の見分かざりしが潼関といふ
函谷関潼関などと漢文の授業でならひし地名なつかし

うすくもる月の光のほのかなる潼関の駅を汽車は走りいづ
潼関を出づれば胡地か、見るかぎり赤土の丘と赤土の谷
まろがれる地平の上の大空の色いろにそみて夜は明けゆく

竜門・石窟寺院

竜門の石窟寺院ほうせん奉先寺四天王のみ脚いだきまつりぬ

中国の人にまじりて抱ほうぶつ仏するわれらをながめてわらふ人々

み仏のみ脚を抱くわれら見てゑまふ人らよへだてもなくに

奉先寺ビルシャナ仏はかわゆけれど則天武後の顔とし聞けば

長安のホテルにて

長安の中秋の月をながめつつホテルの並木のかげを歩むも

三日月の頃に出でにしわが旅は長安にして望をむかへぬ

こほろぎのしきり鳴くなる並木道長安の月を見つつ歩むも

まどかなる月かげ見れば何ぞただむかしの人のうへ思はるる

いにしへのみ祖たちあまたここにして大和の国をしたひけむかも

かへるべきすべうしなひて大唐のみかどに仕へてをへにし人もあり

夜ふけしホテルの前の大通りゆく人まれに月てりまさる

長安の宿の一夜の中秋の月にあたると思はざりけり

秦始皇帝陵

大き穴うづめて並ぶもののふの埴輪いさまし始皇帝陵

水晶のひつぎに入れる始皇帝にならへりと聞く毛前首席は

焚書坑儒すなはち批孔文革と前首席即新始皇帝

長安の朝

ビルの間に朝日はのぼる、長安のホテルの庭に立ちて仰げば

日はすでに輝きのぼるを朝庭にこほろぎの声しきりするなり

日はすでにのぼりて空の明るきに大き望月白くかかれり

半坡博物館

からくにの六千年の文明のあとをたどれば思ひはてなし

昭陵（唐太宗陵）

昭陵と思ひし墓は將軍の李勣の墓と石碑なりけり

昭陵は山の上にして陪陵を二百あまりもめぐらせりといふ

長安から北京へ（九月七日）

期待せし内陸飛行の旅はしも振動はげしく外もよく見えず

飛行機の振動足よりひびききて鼻音つねに耳を閉せり

青き水たたへし湖、大きダム、太原といふステュアーデスは

土色の水のみ見て来し旅なれば青き湖の色のなつかし

山々はうすがすみつつかぎりなく飛行機の左右に重なりにけり

北京毛沢東前首席記念堂（九月十一日）

声もなく進む兵士の列のあとをわれらもすすむ記念堂へと

ざくろの木うゑてありけり西安の秦始皇帝の陵に見し如く

水晶のひつぎのゆゑか毛首席の死に顔あまりに大きく白き

始皇帝の水晶のひつぎにならひけむ毛前首席の棺なりけり

毛首席の死に顔の前を兵士らは顔をもさげずにただ見つつ行く

すすみゆく兵士のまなこに悲しみも畏れも見えずただ進みゆく

帰国（九月十二日）

うす雲の走るたえ間に赤き土赤き川見ゆ中国を去るに

赤き川をいく筋も張りて大陸の緑の田畑つらなりにけり

赤き水黄河を治めて立ち上る漢民族のいのちたくまし

飛行機が海に出たりと思ひしは大きな湖を渡りしといふ



大陸を去りて日本に近づけば海青く雲の白き目にしむ

ただ青き海のだだなか点々と航跡白く船の行く見ゆ

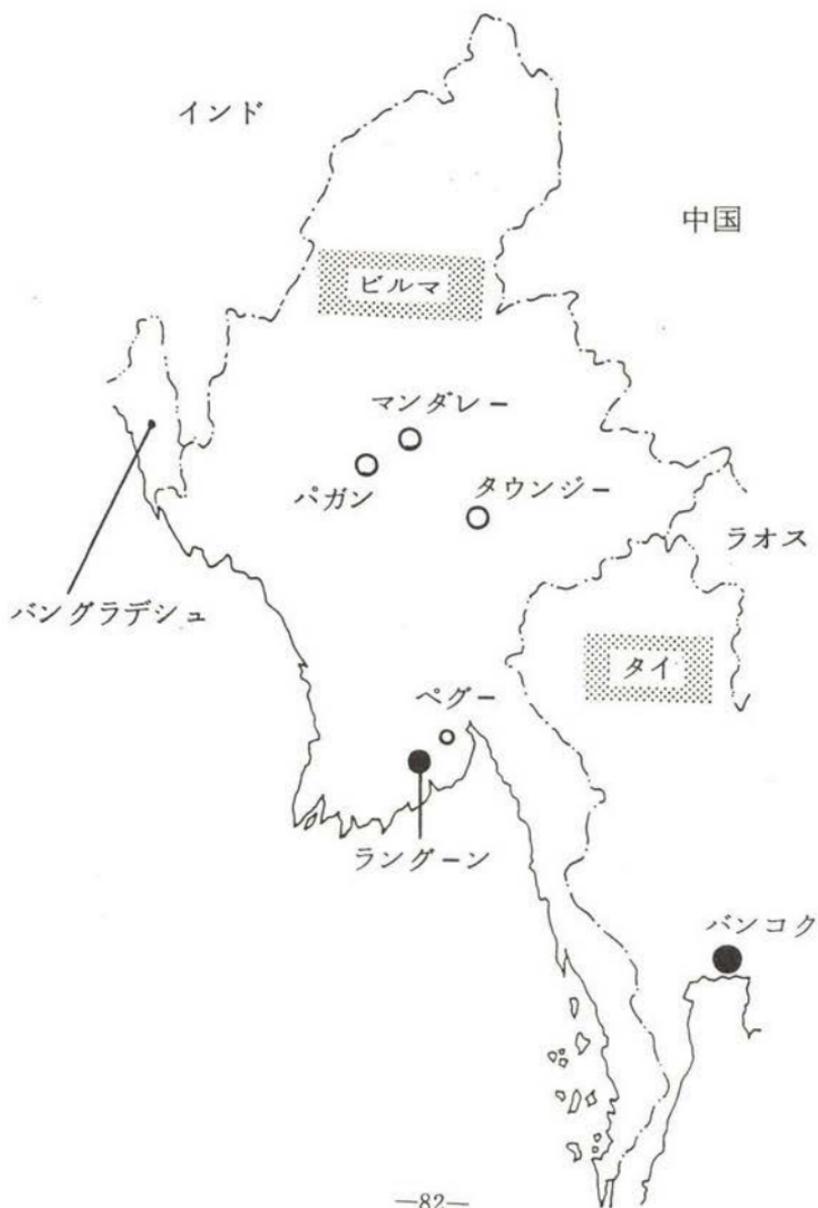
飛行機の上より見れば白く小さき点なす船の行く方しらずも

陸おほふ草木みどりに水清き国に生れし幸思はずや

飛行機の窓の高みの思はざる空に小さき不二見えにけり

七、ビルマ紀行の歌

(昭和五十五年八月十五日～八月二十四日)



出發前夜

ほそくあはき月たちにけり明日はしも遠きビルマに發たむとするに
三日の月見て明日たたば南のビルマの月はいかにかあらむ
たたかひの終りし八月十五日その日ビルマに旅立たむとす

八月十五日朝

数ふれば三十五年になるといふ大きいくさをはりし日より
終戦の大みことのり神前によみまつりけりことしのけふも
大いなるいくさをさめて国民のゆくへさだかにみちびきたまひし
大きいくさをへたまひける大君のみことしよめばかなしみせまる

としごとによみまつるなるみことのり年ふるままにいよよかしこし

出発 八月十五日

こみどりの野山の尽きてとほ長き浜のなぎさを見つつ機はゆく

とほ長き浜のなぎさのうへたかくわが機はこえて海に出でにけり

雲のまに遠く小さき富士見えて機は日本の国はなれゆく

雲のまの遠く小さき富士なれど裾遠長くひきてそびゆる

うすがすむ伊豆七島の島のかげのつぎつぎに見ゆ機のゆくままに

うすがすむ日本の山々のほのかなるかげ重なれり雲のあひだに

○

一すぢの青空遠く雲のまに見えみて機上の空暮れむとす

稲光りするたびに群立つ雲見えて機上の空は暮れはてにけり

バンコク一泊

外国の旅の一夜をめぐらしくよく眠りけりにはとりを聞く。

八月十六日

くれなづむビルマの空に利鎌なす月さはやかにあらはれにけり

ビルマ・ラングーン（首都）

金色のパゴダ西日に輝きてわき立つ雲にそそり立ちけり

音にきくシュウエーダゴンの金色のパゴダ（塔）を正目まきにうちあふぐかも

みな人のささぐる花のほかなるかをりただよふパゴダパゴダに

うつくしきをみなを前にみほとけの道を説くらしき僧もありけり

何となく気高き感じのする僧をいくたりも見つビルマのパゴダに



すずしげに棕櫚のそよぐに窓あけてみれば吹きいる風なまぬるし

遠く来しビルマの今宵、断水のうきめに会ひぬ、暑気当りして

風に舞ふ紙かと思しはビルマにてタコあぐるなり窓の外に見ゆ

英連邦兵士戦歿者記念会堂に署名して

旅遠くビルマに入りてとつくにのつはものたちのはかとむらひぬ

ペグー（古都）へ

雲海の空のかなたに切れ切れに青ぞらの見ゆ雨期のビルマは

飛行機にのりてはじめて目にしたる青ぞらなつかし雨期のビルマは

大いなる寢釈迦ねしよか寺院の裏側に若人つどへり大学生といふ

こともなき余興に興ずるありさまはビルマも日本も変らざりけり

大いなる寢釈迦ををがみ出でくれば男の子いも（甘蔗）売る門の前にして

かごにもるさつまいもの色くれなるのあざやなりけり日本に変らず

ラングーンへの帰途車中、夕立にあふ

フロントのガラスたたきて大つぶのビルマの雨期の雨ふりいでぬ
窓外のけしきけぶりて見えぬまで篠つく雨のふりいでにけり
幾たびかしのつく雨をつきぬけてラングーン街道ジープはゆきぬ

○

雨ふりて青田のあまたつかりけむ住む人はいかに、ながめてゆけど

パガン・パゴダ

ほのぐらき寺院の壁画つぎつぎに浮き出づるなり照らすひかりに
浮き出づるパゴダの壁画つぎつぎにあらはるる見ればゆめの如しも

パガン雑詠

たふれたるパゴダと光るイラワジ（川）とパガンのホテルまひるしづけし
見廻せば紅もゆる夕焼の空にパゴダの数しらず立つ

たふれたるパゴダのあまたつらなりてパガンの古都の音なく暮るる

イラワジの夜の闇にゐる家船に女の足のほの白き見ゆ

イラワジの夜の闇の中舟人らわれらかくみて何か語らふ

雲のまに星くづ繁く見ゆれども日本の星を見わけえざりけり

パガンの宿にて

いつのまに風かはりけむ酷熱の夜半にさむればすず風の吹く

吹きいるるあかときの風のすずしさのいはむすべなし暑かりし夜に

パガンなる一夜はすぎぬあかつきの鶏なくきこゆ二時とはいふに

雨期といふ篠つく雨の降り出でて雷さへなりぬこのあけぐれ暁昏に

雨音と雷とのたえまにあかときの鳥の音きこゆ何どりならむ

何の木の花ともしらぬ木の梢うれにわがききしらぬ鳥の鳴くなり

パガンからマンダレーへ

雨ふりて川幅とみにひろがりしイラワジ川にそひて機はゆく

密林の中に青田の見える来てわが機はやうやく町に近づく

ラングーンよりパガン（古都）へ飛行機にて

幾すぢも川流れて見る限り青田つづけり雲の下びに

白雲の群湧き立つとおそれしがわが機の下を流れゆくなり

目の下に見ゆる川すぢうねうねとくねりてビルマの文字に似たりけり

漠々と雲の流れてイラワジ（古都）のデルタ地帯は見えずなりけり

雨やみし朝の並木の大通り托僧のあひつぎて来る

ナットの宵祭り

ビルマのやナットの祭りのふと入りしきじき(棧敷)にくはしみこ

(巫女)を見出でぬ

日本人によく似し面わけだかくて十二の年よりみこつとむとふ

ビルマ人ナットの祭りのうつくしきみことかたりぬへだてもなしに

半月はんげつに祭りをはじめて満月にをはるときけばいよよゆかしき

まつりたるビルマの神像をひとつづつみこは説くなり何へだてなく

人しげきまつりの空に半月のおぼろに照れり雨期の雲まに

どしゃぶりの雨ふりいでぬみ祭りに集ひし人らいかにしつらむ

くさぶきのはかなき家にランプもてくらせる人をあまた見にけり

とつくにのまつりの庭にへだてなく里みこたちと語らふたのし

小安貝盆に散らして里みこがわがようらへばか何かかしこし

ゆくりなくあひたる巫女みこが心こめわがようらへばかしこまれぬる

夜半さめて眼まなこさえたりうつくしきビルマのみこと語りしなごりに

かへりきて部屋にかけたる花かざり一夜をすぎてなほかをるなり

タウンジー（州都）

ブーゲンビリヤ、朝顔、ダリヤ秋草の咲き乱れたりホテルの庭に

市 場

黒衣きるパオーの人らおもだちのわれらに似たり山地の人といふ
タンジンの市場をゆけば野菜くだもの日本にあるものみなあるうれし

ボダイ樹のあつた僧院

空に鳴る風鈴の音タンジンのパゴダすずしくことそぎてゐて

慰霊の木柱

慰霊碑はタンジンの町のはづれなる草むらに立てる柱一本

古びたる柱に読みとる大東亜戦争戦歿者慰霊の文字かなしも

いたましきいくさにうせにしつはものをとむらふかこの一本の柱

持ちて来し線香ささげわが友は読経ささげぬ草むら中に

ささげたる線香の火を地に消して立ち去る心人知るらむか

インレ湖

片足もて擢をあやつる舟人の絵の如く見ゆインレ湖ゆけば

ハ、スリランカ紀行の歌

(昭和五十五年八月二十四日～八月三十日)



コロンボ（首都） インターコンチネンタル・ホテル

南のインドの海の白波のしき波たえず浜に寄る見つ

遠長き浜にしきよる白波のしぶきにくもるセイロンの海

遠長くつづく浜辺の弓なして岬となりて海に向き立つ

はてもなき大海原に向きて立つ遠き岬のなにかかなしき

南へまた南へと旅を来てコロンボの海の砂浜に立てり

ペラ・ヘラ祭り（古都キャンデー）

おのづからもろびとのさちをいのらるる仏齒寺ぶつしじの奥深く請じ入れられて

白き衣まとへる人のみ寺にていのるすがたのたふとかりけり

百万の人つどひ来てみほとけのみ寺のまつりをいとなむといふ
雨ふりて傘さす人は多けれどつどへる人ら動くともせず

夜明けより人つどひ来て道のべに坐りて祭りを待つといふなり

みまつりの今宵を知らする満月は雲まにわづか見えてかくるる

象使ひ鞭をすどく鳴らしつつねりてぞ来つる先ぶれなるらし

火をつけし綱をたくみにあやつりてねりくる男の子いさましきかな

かがりもてわきかためつつつぎつぎに象の行列はとりどりに来る

力強き太鼓にあはせて着飾れる男の子ら踊りとびはぬるなり

つぎつぎに来る行列の笛太鼓やむまもあらず人踊り来る

かなでゆく楽の音につれとび出でて踊りの中に加はらましを

とりどりに踊りかなづる楽の音に心は入りて時を忘れつ

ペラ・ヘラの祭りたのしもシンハリの遠き代よりのいのちみなぎる

キャンディー 郊外ゲスト・ハウス

キャンディーの一夜の宿の朝戸出にマハウエディ川のほとりを歩む

椰子の木の見ゆる川辺の向つ丘のしげみの空に朝の雲ゆく

うるはしき南の国の鳥の音をきくがたのしさこの朝戸出あさとに

うつくしき花咲き乱れたる川ぞひのすずしき道をゆくがたのしさ

椰子やし多きしげみをうつつしてマハウエディの川は動かず流るともなく

動かずと見し川水は文あやなして流れたりけり岸にて見れば

うつくしき花咲き乱れ鳥のこゑうるはしきここは常世のごとし

ポロンナルワ（古都）

ときつぐる鶏のこゑ聞ゆシンハリのポロンナルワの一夜のあけて
まかがやく明けの明星、明けしらむ中空に見ゆポロンナルワにて
セイロンのふるきみ寺の石像のやさしきすがたに心うたれつ

マヒンターレ（仏教伝来の聖地）マヒンダの岩ほ

マヒンダのいはほのいただき風を強みよもをみさけむ利心うせつ
マヒンダの岩の上よりおそるおそるながむる地平、円をなしたり

うすがすむはるかかなたにパゴダ三つ見ゆるはアヌドラプーラ

(古都) なるらし

旅遠くめぐり来りてマヒンダの岩ほの上によもを見はるかす

シギリヤ壁画 (五世紀)

風つよきはしごあやふくのぼり来て岩ほの美女のあやしきを見つ

コロンボの夜

大いなるみ寺立てりき日本の国のおこりし時より古く

印度洋よる白波を欠けそめし月照らしたりなぎさをゆけば

白波のよするなぎさの夜のやみに物を乞ひよる子どもらあはれ

外国の人としみれば物を乞ふ子どもら見るがかなしかりけり

戦のをはりしあとのわがくにのことおもひでぬまづしき子らに



コロンボの海辺のホテルに目さむれば浪の音たかしおこりては消ゆ

九階のホテルの部屋の暁昏にしほざるの音ききあかぬかな



比較的緑の多きバンコクをわが機は発ちぬ日本に向ひて

帰国

外国の旅つつがなく帰り来て縁に憩へば虫の音たかし

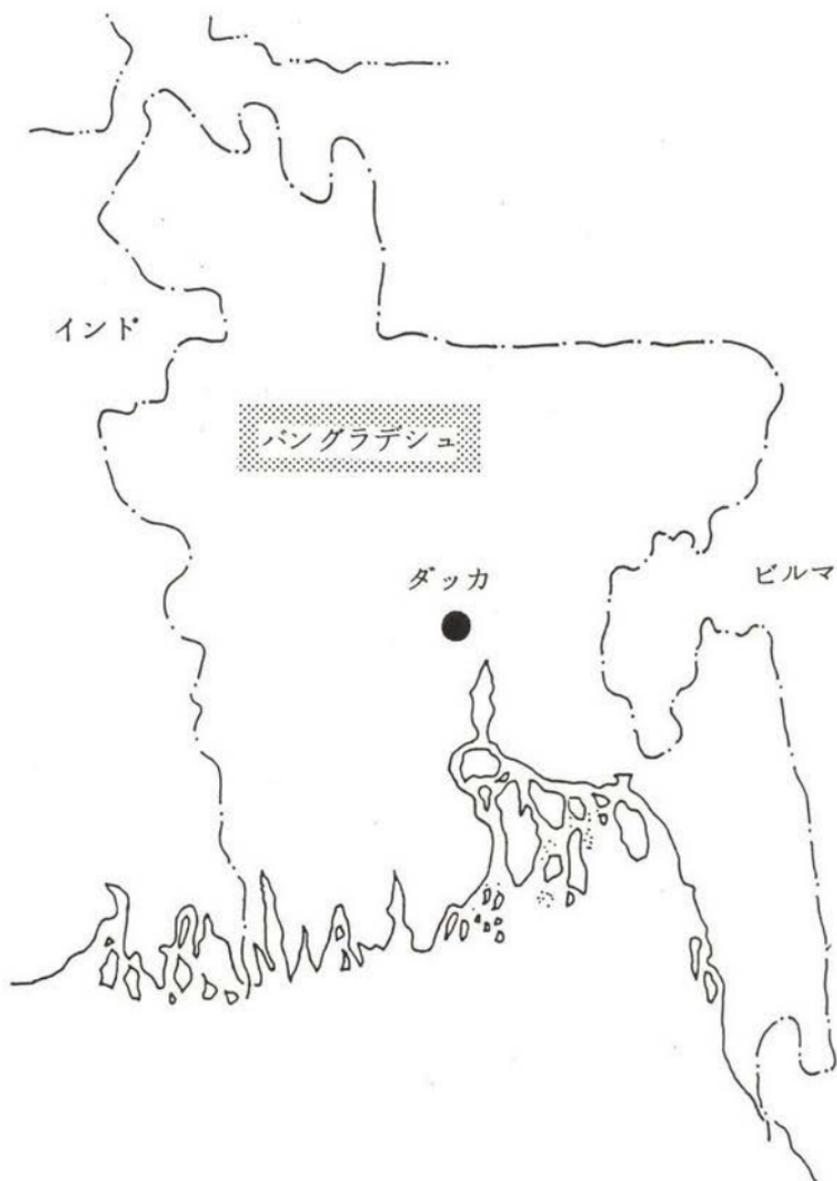
こほろぎのひた鳴く聞きて年毎のみたままつりの近きを思ひぬ

国のためいのちささげしなき友のひとよしのべばわれははづかし

今生の最後となりし語らひに友のつげにし言葉を思ふ

九、バングラデシュ・ダツカへの旅

(昭和五十八年二月十五日～十八日)



成田にて

目ざむれば窓一面の紅の朝焼けの空、けふも晴なり

予定せし仕事を日々に果すべくバングラデシュに出て立つけふは

日々のわが仕事果すとつとめむに残り少なきわが代は終へむ

ダッカのホテルにて

うすがすむダッカの町の空遠くモスクの如き議事堂そびゆ

とぼとぼと石運ぶなる人々の貧しき見ゆる朝の窓より

宗教と言語と分かれてこの国の一体感のよるべなしといふ

ベンガルのダッカのホテルに朝覺めて東にむきて大御歌誦す

かにかくにつとめ半ばはたしけりわれをうれふらむ妻子しのびつ

戒嚴令下

人まれに走るが見えて音もなし戒嚴令下ダツカ夜に入る

はるかなる街灯の灯にとぶ虫の動くのみなりダツカの町の夜

テレビ

日本語のしらべに似たるベンガルの歌姫の歌聞きあかなくに

ことそぎて心こもれるベンガルの歌は聞きつつ舞ひ出でましを

ベンガルの歌のしらべのかなしさよことばは知らね聞き入れらるる

難民小屋

ふるさとを逃れて遠くダッカの町の難民小屋に住む人あはれ
ベンガルの人の貧しさそれもあれどビハール州の難民のそれは
ふるさとをはなれて遠く家もなく竹とむしろの小屋に住む人
貧しさを人は言へども貧しさにほろびぬ国かベンガルの国
地の果に落つる夕日をベンガルの景観といふ目に残りけり
ベンガルに十年すごせる日本人、君はアジアの石ずゑならむ

朝

ホテルの窓かたくとぎせば暁のイスラムの祈りの声聞きとれず

ダツカの町夜明けの大路の濡れたるは朝露なりと聞けばともしも
外出禁止の時すぎたるか朝の町自動車の警笛の音遠長き

蚊の群

灯を消せば窓のガラスにむらがりて蚊のとび舞ふが何かあやしき
マラリヤをつたふる蚊どもむらがりて窓辺をはなれずとぶがゆゆしき

水

ソナルガオン・ホテルの水は日本の清水の味すともてはやし飲む
思ひきやバングラデシュの国に来てホテルの水をかく飲まむとは

不思議なる夢を見るかなベンガルの荒地に倒れし大さき仏像

かにかくに病むこともなくベンガルのダツカをけふ立つ逃るるごとくに

成田着

上弦の片われ月の空港の空に浮きたり成田に着けば

心なげに見ゆる月かけひたはしるわれらの車につきてくるなり

灯のしじ照る東京のビルの間に上弦の月音なくしづむ

あとがき

昭和五十九年十二月二十八日の各新聞は、新春歌会始の入選者が決まったことを一斉に報じた。その中で朝日新聞・全国版は、それについて次のように記している。

新春の宮中行事として一月十日、皇居で行われる歌会始の入選者九人が二十七日、宮内庁から発表された。また天皇陛下からとくに招かれて歌をよむ召人には、劇作家で日本芸術院会員の宇野信夫氏（八〇）〓本名、信男〓が決まった。

お題が「旅」と身近なテーマだったためか、応募された歌は昨年より約六百首多い三万四千九百首。うちブラジル、米國、カナダなど海外からが二百二十首あった。形式の不備、延着などで失格になったものを除く二万八千五百五十首の中から現代歌人協会会員の窪田章一郎氏（七六）ら五人の選者と宮内庁の委員が入選歌を決めた。

入選者の最年少は五十四歳で三、四十歳代が一人もいなかった。平均年齢は昨年の五十八歳からぐんと上がって六十三歳に。また主婦が九人のうち六人と多いのも特徴だ。

入選者は次の通り。（敬称略）

として、その中に、

夜久正雄（六九） 〓 亜細亜大学教授、東京都武蔵野市桜堤一―三―七五―三

とあった。そして、入選者の代表ということであろう、夜久先生の顔写真入りで、次のようなインタビュー記事が記されていた。

陛下のお歌研究五百首

入選者の夜久さん

「陛下のお歌を研究している者が入選するなんてとても光栄です」と、喜ぶのは亜細亜大学教授（国文学専攻）の夜久（やく）正雄さん（六九）。

東大に在学中から歌人の三井甲之氏に歌を学んだ。師が研究していた関係で、そのころから陛下のお歌に接してきた。戦前は歌会始のお歌。戦後は折に触れて新聞に発表されたもの。それに陛下の歌集「みやまきりしま」。これらの一首一首を丹念に研究、解説をつけ、三十四年に「歌人・今上天皇」にまとめた。夜久さんが研究したお歌は今では五百首をこえている。

見たまま、思ったままをうたうのが歌よみの理想。陛下のお歌はこれに近い。細工のない、非凡なる平凡です、と夜久さんは解説する。陛下のお歌の中では「たゆまずもすむがををし路（みち）をゆく牛のあゆみのおそくはあれども」が好きという。来年は

ウシ年。陛下のえとでもある。夜久さんは、この歌に「人生態度の指針」を見る。

昭和三十七年に歌会始が初めてテレビで中継された。その時に解説したのがきっかけで、その後毎年、応募してきた。入選歌は十年ほど前に研究旅行でネパールを訪問した時の思い出をよんだ。作風は陛下のお歌に似ているのでは、との質問に「とんでもない。陛下の、自然とひとつになった姿にはかないません。私のは、題材が釈迦（しゃか）の生誕の地で珍しかったからではないのですか」と謙そんした。

明けて昭和六十年一月十日、午前十時半から、皇居の宮殿「松の間」において、古式ゆかしく「歌会始の儀」が行われた。NHKテレビはそれを一時間にわたって放映した。諸役による朗詠が、まず入選者の年齢の若い順に披露され、七番目に「東京都 夜久の正雄」と呼ばれ、夜久先生は立って、深々と文字どおり最敬礼された。朗詠はゆったりとした節回しで二度詠いあげられた。

その歌は昭和五十一年三月二十日、亜細亜大学アジア研究所の「ネパール調査隊」に同行された時の思い出を歌われたものであった。私もその中の一員であったので、その時の情景を今でもありありと思ひ出す。釈尊の生地ルンピニを訪れた日（三月二十四日）の帰り途であった。その情景を私は拙文「ネパール紀行」の中で次のように書いている。

日はもうとっぷりと暮れてしまった。電気などというもののないこの荒野は真の闇であ

る。ただわれわれの乗ったバスだけが、ガタガタと走っているだけである。突然バスがとまって、運転手が降りていった。エンコしてしまったかと思つて、一瞬ヒヤッとしたが、そうではなく、橋が危険だから全員降りて歩いてくれということであつた。夜空がきれいであつた。満天の星である。

と。この時、橋のたもとに螢の飛びかうのが見え、皆で「螢だ、螢だ」と言つた。これが今回の詠進歌となつた。

こう書きながら、ペンを休めてあの時のことを思い出していると、いつの間にか、夜久先生を筆頭に、あの時の調査隊のメンバー全員が、陛下の前に召されて、螢の光景を申し上げているような錯覚にさえおそわれ、恐懼する思いになつた。

「歌会始の儀」のあつた翌日、大学の研究室に夜久先生を訪ね、亜細亜大学関係者による祝賀会の開催と歌集の出版とのお許しを願つた。先生は祝賀会は固辞されたが、歌集の出版に関しては喜んでご承諾下された。しかし祝賀会の方も、内内によるささやかなものにするということ、一月三十日、吉祥寺東急インで開催されることとなつた。

歌集については、当初、私たちの案では、かつて先生がご自身で出版された歌集『流星』、『戦後』、『武威野』（昭和十三年から二十六年に至る自選短歌千首）の三部作と昭和三十年に桑原暁一氏によって刊行された『いのちありて』（五百首）以後の作品の中から、選んでいた

だいたいのものを出版する予定であったが、歌集はポケットに入れて持って歩けるほどのものがよい、という先生のご希望もあり、しかも、今年の勅題であった「旅」に因んで、アジア各地を歩かれた時の歌に限定するということになり、ここにこの歌集『旅遠く』が刊行されることとなった。歌集刊行の話が出たのが一月十一日、出版は一月三十日の祝賀会に間に合わせるという、誰が考えても不可能に近いことが、今、現になされつつあるのである。これは多くの方々のご協力の賜物であることは言うまでもないが、とくに千々和純一氏、山本忠士氏、岡部篤厚氏、加藤伸吾氏、加藤幸雄氏らの献身的努力と株式会社松井ビ・テ・オ印刷の夜を日に継いだご協力がなければできないことであった。ここに記し、この歌集につながるご縁のある方々と共に御礼を申し上げたいと思う。最後に、いつの日かまた先生の歌集が皆さま方と共に刊行できる日のあるであろうことを願って擱筆する次第である。(梶村昇記す)

作者略歴

一、大正四年東京都渋谷区に生れる。

一、東京府立一中・第一高等学校を経て東京帝国大学文学部国文学科卒業。

一、現職 亜細亜大学教授・学園理事、社団法人国民文化研究会理事

一、▲著書『三条実美歌集「梨のかたえ」とその研究』（昭和十九年）『ホイットマン草の葉

抄』昭和二十五年、松田福松先生と共著）『歌人・今上天皇』（昭和三十四年初版、昭和

五十一年増補改訂）『古事記のいのち』（初版・昭和四十一年、五十八年改定版）『日本文

学における魂の行方』（昭和四十八年編著）『白村江の戦』（昭和四十九年）『詩と政治―

明治の詩魂』（同前）▲自選歌集「流星」「戦後」「武蔵野」「いのちありて」▲共編『三

井甲之歌集』『三井甲之存稿』『川出麻須美遺稿集「天地四方」』▲共著『天皇と天皇制に

ついての基本的思考』（昭和四十年、小田村寅二郎氏と共著）『短歌のすすめ』『短歌のあ

ゆみ』（昭和四十六年、山田輝彦氏と共著）▲共編『日本思想の系譜』（国民文化研究会

版・時事通信社版昭和四十七年）『明治天皇詔勅謹解』（講談社昭和四十八年）▲英訳書

THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (Walter Robinson 氏訳、昭和四十四年)「古

事記全巻朗読吹込カセットテープ」(昭和五十四年)▲『しきしまの道研究抄』近刊予定

『旅遠く』

—アジア巡礼紀行の歌—

昭和六十年一月三十日 発行

作者 夜久正雄

編集 夜久正雄作 歌集『旅遠く』
発行 刊行委員会

武蔵野市境五―二四―一〇

亜細亞大学内

〇四二二(五四)三一一代

印刷 榊松井ビ・テ・オ印刷

宇都宮市平出町四二八七―七

〇二八六(六二)二五一一代



旅 遠 く

—アジア巡礼紀行の歌—

夜久 正雄



